

て創設されている。これが大阪医科大学↓国立移管の経緯をとって引きつがれる。これが大阪大学歯学部へのルーツである。北海道の場合は、医学部設立七年後、一九二七年、付属病院に歯科が設置され、それが充実されて行く。歯学部が設置されている。

東北の場合は、県立宮城病院のころに歯科がおかれ、それが引きつがれる形で一九三三年、講師として野田穰が就任し、一九四二年からは講義としても歯科学が開講されている。その後歯学部も創設されている。

京都の場合は医学部の発足は早かったが、歯科学講座の創設は一九四四年に美濃口玄が助教授になってからはじめられた。これはすでに一九一六年から府立医大に、京大出身の本永七三郎が主任として歯科学講座をひらき活動していたためである。京大にも歯学部はおかれていない。

なお、帝国大学以外では千葉大学医学部の歯科はすでに一九一三年から県立千葉医専のときから第二外科で歯科を担当し、一九二一年に入戸野賢二が主任となってこれが国立移管校に引きつがれている。

私立大学医学部では一九二〇年、慶応義塾大学医学部設立とともに、岡田満が主任教授となり歯科学教室が発足している。

(一九九五年一月例会)

## 漢代の解剖学

家本誠一

中国古代医学は解剖学を基礎にして構築されている。この医学を理解する為にはその解剖学を知らねばならぬ。素問、靈樞、難經、漢書を資料として漢代の解剖学を考えた。

解剖に関する記述は漢書卷九十九王莽伝にある。「霍義寛、王孫慶捕得、莽太医尚方與好屠共剝之、量度五藏、以竹筵導其脈、知所終始、云、可以治病」。此の記述の要点は三つある。一つは五藏の度量である。難經四十二難には、口齒から肛門に至る消化管各部の大きさと重さ、五藏、胆、膀胱、氣管と咽門の大きさと重さについての記載がある。この時の解剖の記録だと云う人があるが、確証は無い。二つは血管の走行を追って、起点より終点に至る全経過を確認したことである。血管系の全体像が心経と衝脈の記載に示されていることは後に述べる。三つはその臨床的活用である。

解剖という言葉は靈樞の經水第十二に見える。「若夫八尺之士、皮肉在此、外可度量切循而得之、其死可解剖而視之」。体表を度量切循して得たデータは靈樞の骨度第十四にある。解剖によって得られたデータの内、藏府の大きさと重さは腸胃第三十一、平人絶穀第三十二に、血管の走行と長さは營氣第十六と脈度第十七に、記されている。

素問陰陽心象大論第五に云う。「上古聖人、論理人形、列別藏府、端絡経脈、会通六合」と。昔の学者が、人間の形態について整然と筋道を立てて述べた所によれば、藏府を解剖(列)も別も分解の意し、血管を左右対照的に整然(端)と連絡配置し、全身を総合的に把握した、と云うのである。解剖は漢代医学が人形の論理を究明する為に意識的に採用した方法である。偶々に行なわれたものではない。

中国古代医学の方法は観察と度量である。そこで得られたデータに類推を重ね洞察を加えて、人体の真相を究明した。解剖は度量と観察を駆使して遂行される医学の最も基礎的な研究方法である。中国古代医学が、近世以降の中医学や日本の漢方に比較して、遙かに優れた実証的合理性と体系性を備えている理由はこの解剖学存在による。漢代解剖学のテーマは藏府と経脈である。

この藏府経脈に関する解剖学的知識の臨床的活用は素問、靈枢の全編に見ることが出来る。

漢代の解剖学は次のような構成を持っている。

一、体表解剖学 a 外的区分(頭、四肢、軀幹) b 体表構成(皮膚、肌肉、筋、骨)

二、内蔵解剖学 a 計測解剖学(骨度、脈度、腸胃、平人絶穀)

b 気の解剖学(三焦、脾胃、精氣、津液、経脈) c 藏府経脈

三、臨床解剖学 a 陰陽五行システム(五行配当表) b 視覚、聴覚、発声の機構 c 營衛 d 精神魂魄

四、発生学

以下、本稿では二のb、気の解剖学に就いて略述する。文献は靈枢の營衛生会第十八である。ここには栄養生理に関する基本的形態学が述べられている。その記述を現代解剖学と対比して考えるに、三焦はリンパ管系統であり、そこを行く気はリンパ(と乳糜)である。

即ち上焦は胃周囲のリンパ管から始まり、食道、肺門、気管支、気管周囲のリンパ管を経て上肢のリンパ管へと接続している。ここを流れる気は衛気とよばれる。その実質はリンパ液である。但し、この気は鎖骨下の血管周囲を圍繞して上肢に至り、太陰肺経の外側を走るが、これ以降の衛気の機能は神経系のそれであつて、リンパの機能ではない。中焦は胸管である。そこを流れる気は營気と云う。胃で消化した食物を絞り、採った津液を蒸留し、その結果得られた精微即ちエキスが營気である。胸管を経て左の鎖骨下静脈角に入つて血液と混濁する。即ち化而爲血である。下焦は腸管と骨盤内のリンパ管である。ここを流れるリンパは膀胱に入つて尿となる。尿を分泌した残りの粕は大便となる。即ち下焦は大小便の振り分けをする器官である。腎はこの過程を制御するが尿は作らない。

三焦を行く気は液体であり、栄養素である。この液体を運行する原動力は脾と呼吸である。脾は気を胃から肺経まで運び、そこから先は呼吸によつて行く。導引、行気は呼吸を整えて気を行なう技術である。心は血液循環の原動力ではない。心尖拍動は胃の大絡の脈動である。

脾は臍臓である。脾は胃と膜を以て相連なる臓器である(素問二十九)。脾臓も脾である。脾は血を蔵して五蔵を温めることを主る(難經四十二)。

経脈は血管と神経の反射現象である。経脈は血液を運行する器官だと記してある。(靈樞四十七)。心経(靈樞七)、衝脈(靈樞三十八)の経路は血管系の主幹の全体像をよく示している。

(一九九五年二月例会)

## ロンドン病院博物館報告

山根 信子

正式名称は The Royal London Hospital Museum & Archives Centre である。

ロンドン市の東、地下鉄、ホワイトチャペル駅で下車し地上に出ると、正面に古くて大きな建物があり、それがロンドン病院の本館である。一七四〇年に施療病院として設立された。

この地区は現在もイーストエンドと呼ばれ移民・下級労働者・港湾労働者・貧民達の居住地区でポリスもあまり行きたがらぬ地区と聞く。昼間でも一人で歩くには少々の緊張を伴う。有色多民族労働者の街で英語を解せぬ人々も多いようだ。病院の案内板には英語・アラビア語・中国語等々で掲示され、外来患者も九九%が有色人種のようにである。

本館と外来棟の間に医学校(二七八五)があり、道一つへだてて向い側が医学校図書館で、その地下室が博物館である。この図書館は一九世紀初頭のイギリス教会スタイルで、内に入ると教会の礼拝堂そのものが図書館になっているデザインで、建物自体も博物館のようである。博物館は一九九〇年九月、病院設立二五〇年を記念して開館された。

一九九一年十月に初めて訪れた時は入館料を払い内に入っても何か雑然とした印象であったが、一九九七年一月の訪問時は、入館料無料で展示も年代を追って美しくわかりやすい展示になっていた。

第一のコーナーは一七四〇年から一八六三年までで一七四〇年当時のこの地区の住民や港湾労働者の様子が良く理解できる展示で、施療病院の存在価値が浮きぼりにされている。この時期、活躍した医師 James Parkinson (1755~1824)、Sir William Blizard (1805~1880) の業績紹介と共に当時使用された医用器械や看護用具、食器類(病院名入)が展示されている。

第二のコーナーは一八六四年から一九一八年までで、私はこのコーナーに最も強くひきつけられた。

一八三〇年~一八六六年頃、この地区では「コレラ」が大流行した。それに対する病院の活動や公衆衛生事業の発展がわかり易く展示されている。フロレンス・ナイチンゲールの活動も大いに影響して彼女の業績も紹介されている。当院の名マトロンである Eva Luckes は一八八〇年から一九一九